

エッセイ

小特集「私にとっての日文研と日本研究」

## 「当然」の陥井

マルクス・リュッターマン

去る一〇月に今道友信氏がこの世を去られた。我々人間の言語に対して無いものを新たに考へ出す作用を期待した哲学者、文化の狭間にいた一人である。今道氏の提唱した想像力を発展させるための大きな課題の一つは「当然」との付き合いであるが、氏のそれへの貢献に言及する前に、縁側に一座を求めてゆっくりと考えてみたい。

縁側に秋の仄かな光が訪れる。膝元があたたまる。山の方より鹿の音がする。クヌギに栗、ドングリに栃。マッチでも刺して人形をつくり、炒っても蒸してもコーヒーに餅の季節柄。生まれて育つ環境に馴染めば、多くのことを自由に使いこなし、生きる事をまなび、安定感を得る。一方、適応した環境に親しくなった余り、その特色を自覚しないほどの「当然」もあろう。「四季」も慣れた風なものであると思ひ込む傾向にある。世には万の四季類があるにもかかわらず、己の四季観念に捕われてしまうことが少なくない。「常識」は安定をば保証するか

も分らない。ところが自覚ないし認識としては誤謬がかなり秘められている。挨拶言葉から、衣食住を経て政界の談義まで、かかる「当然」のままの心地良さで生きるか。或は目覚めてみながらの不安を憚らず、「当然」に挑戦してみるか。我々は古里を離れてすぐさまこのよ  
うな疑問をもちはじめ、誘惑をうけ、冒険に出会うだろう。この際、不安な航路に出帆はする  
が、向こうの海岸についてみれば、新しい安定感を獲得するかも知れない。といっても、保証  
はつかず、リスクを掛けることになる。

事実、人類の大部分は夙に古里を遊離し出している。世中の過去は溪谷のように多岐にわた  
る道々で現在の大道に合流している。神話学をはじめ、天文学や医学、近代物理学の量子研究  
まで、東西南北が一つになっている。古事記や万葉集の歌がストラビンスキーやショスタコー  
ヴィチの曲の題材となり、ベートーベンの第九演奏会が日本の大晦日行事となり、アメリカの  
バーバー作の曲に中央ヨーロッパの作曲法を組んで、現在中国で演奏されているように。そし  
て武満の曲はパリやクリブランドで響くこのごろである。文化は場所と時間を超えて、多彩  
に、多様に受容され、地球を巡っている。

確かに某共同体が自ずからの文化を所有しているという感に捕われた時代は疾うに過ぎた。  
また、その共同体員をその共同体の隷属物とのみ限定している考えも最早あたらない。ドナル  
ド・キーン氏は、今は日本国籍になった如く。しかし規範的に人間・集団・個人を地域的に、  
その祖先の縁によって政治的に、教育的に縛り、拘束することは無益であろうとも、完全な自  
由自在にはたして可能であろうか。個々の事情、個々の集団と個人の過去に起因している制限  
は自然にあると認めても、それを無視すれば自覚には深見が欠けてしまう。否応無しに限度を  
もたらす要素は歴史に起因し、生まれて身に付く言語（話すこと、答えること）などに根ざし

ている。場所や、気候、農法などは変わっても移動する人間は神話、言葉や伝承をいわば抱えて運んでいく。規範的ラシサ観念、人間と文化の同一性、規範的な型という問題などはさて置いて、先に駆けている形成結果（伝統）自体があることは否定できない。歴史的な深層は潜在しても、善くも悪しくも顕在化しうる。歴史の作用は国籍の枠を超えるが、優れて具体的な環境に起源している事実も忘れてはならない。病理を論じる仕事即ち病歴の分析であるように。トラウマの理解は即ち当該人の過去の捜査から始まるように。

ひるがえって、デカルトの名言である EX NIHILO（無前提の学問）という呼びかけが上記の主張に逆らい、一世を風靡したことを思い起こす。一八世紀のフランスの百科事典類もデカルトの原理を継承し、伝統（伝承）にしたがう認識法に反して理性という概念を対処させた。現在の自然科学のまたとない影響力は既にハイデッガー（実はハイドエツガ）に違和感を抱かせたが、無前提的理性によるいわゆる客観性への期待にもとづく世界観をハンス・ゲオルク・ガダマー（実はガーダマ）がその著名な『真理と方法』において根本的に問い直したことが周知されている。ガダマーの所見にはいくつかの側面があるので批判も勿論あびたが、ここでは世の解釈法を巡る認識への貢献の一面として、先入観の意識化についての見解を評価したい。ガダマーの見解では或は人と式代（会話）しながら自分を問い、或は古典を解釈する仕事は、取りも直さず問答式の形式で研究者自らの前提（先入観）を意識化することによってこそ認識がうまれるという。

伝来している古典および歴史との会話を通じて自ずからの先入観を問う切っ掛けとなる必然を提唱した意味は大きい。即ち己の視野を広げる行為は少なくとも私見の相対化につながる。制限された人間の認識力で理性的客観性が得られるかをめぐる是非についてはここで論じる余

裕はないが、ガダマーの認識論にしたがえば、研究者はせめて過去、文化、他人を同等の相手と認め、私見を相対化、つまり拡大することが期待される。

例えば挨拶の用語、漢語ではない「おそれいます」などの中国から受け継いだ語彙の翻訳性、「批判・名刺・お辞儀」などの語意と習慣、歌の音階、謙遜の理念、サカナ（酒菜）が魚の意味を帯びた背景、冬至に近いお正月を依然として新春とする年賀の風習。やはり「当然」が多い。ヨーロッパの例を見ても同様。イエスによる救済を中心とする信仰、社会主義と民主主義、各々のイデオロギーが絶対的な真実に近い通念として定着し主張されている。理念は即ち真実概念に絡み、融通を限らせる性質が著しい。大学と訳されている *Universitat*（中世の「共同全体」）もよく単純に西洋近代学問の「全般・百科」と理解されるが、その言葉の原意が意識から離れ、残るのが無意味の音のみ。これらの「当然」という誤謬が驚くほど拡散している。さればこそ「当然」の常識を揺るがす際、危機感をおこしかねない。触発されることで感謝を覚えずに、かえって違和感を抱く人もいるだろう。端的に示す例を語れば、岡倉天心の *The Book of Tea* という本がハイデッガーの概念「*Dasein*」（現存、中国では在世とも）のヒントになったと主張した今道友信に対して、ハイデッガーの教え子ガダマーが気を害したという逸話がある。視野拡大を唱えた当人が心の狭さをつい露呈するという、皮肉なようなありきたりのようなお話。

某政治勢力が絶えず人間・文化の同一性、規範的な型（ラシサ）を唱えつづけるという問題はさておいて、共同体（国）の形成結果自体があることは否定できないと右に述べた。つまりは教訓的規範性はともかく、日本という対象を考察することを専門とする研究機関も、言語的遺産と非言語的遺産の現在への作用の研究を抜きにして、いかでか存続できようか。そして、

この遺産を分析する資格をもっている世界日本学者の協力を得ずして、もっぱら日本語認識に疎い者を弟子に、日本文化の謎を「秘伝・伝授」するような構えに陥いりそうな動向には疑問を投げかけたい。古典の語彙と文法にもとづく自主的な整理作業に馴染みのある者こそは社会の深層と習合性、折衷性に視線が届き、丁寧に訳して、適切に他言語に置き換えることを目指す。

文化遺産についての理解はその担い手と思われる者自身にとっても完全でありえない。「先天的な」資格から得た権威を理由に、文盲の客のために「正しく」史料（または「扶桑」そのもの）を読み解いて上げるような教法の権威主義に伴う心地だけはいいかもされない。しかし、むしろ自主性を蓄える、つきあい難そうな、頑丈な研究者を相手にしてみれば、胸中の痛感が生じても、長い目では癒しを招く。特殊性の発信よりは普遍性への相互視野拡大。なぜなら、二千年以上の文化史が齎した現在の「当然」にこそ実証解読の仕事が相互に待っているからである。国木の葉っぱがまたとない金色に染まった今年の秋は岡倉天心とハイデッガーの交差点に立ち向かい、ガダマーの考察と出会い、今道友信の研究を振り返り、その計報を機に「当然」現象学の必要性につくづく思い耽ったのである。

（国際日本文化研究センター准教授）